

石巻赤十字病院 本部支援

3月19日～25日 熊本健康管理センター事務・八田 晴生さん

震災後、石巻赤十字病院に救護本部が設置された。全国からやってくる救護チームを効率的に送り出して避難所を網羅し、石巻圏の被災者に必要とされる医療サービスを届けるための、連絡調整係り。全国の日赤から支援要員が送り込まれた。3月20日～25日、九州ブロックから石巻の本部支援に10人が石巻に。八田晴生さんはその一員として参加した。



管理要員・八田晴生

10人は東京の日赤本社で合流、看護師30人と大型バスで20日夕、現地入りした。3人が病院の案内を担当、3人が全国からやってくる救護班へのレクチャーと資料作り、八田さんら4人が救護本部に。本部には石巻病院のスタッフ2人がいて、その補佐にあたった。

当時、携帯電話は不通のところが多く衛星電話も通話中に途切れる。連絡はトランシーバーが中心だった。救護班は日赤だけではなく各地の大学や医師会からも来ていて、八田さんは60～70の救護班の連絡係と定時連絡をとり、巡回している避難所間の道路状況の確認や避難所が大丈夫かどうか、不足機材がないか、などの連絡も受けた。

巡回診療に派遣する前準備として、道路状況の確認にも地元スタッフに同行して3～4回出かけた。ヘドロに覆われたり流された車や瓦礫にふさがれて通れない道路などがあり、う回路を探した。

朝6時に起きて救援物資をトラックから倉庫に運び、救護班が朝礼後に出発するのに合わせてスタンバイした。日暮れまでにほとんどの班が帰ってきたが、午後5時半を過ぎて帰らない班には連絡を入れた。午後6時に救護班からアセスメントシートを回収して、それを元に翌日の準備と会議。夜中を過ぎることもあった。外の状況はある程度分かっていたが、病院内の仕事なので、外に出たのは道路確認のときだけだった。

食事は本部から配給されたアルファ米や携行食、缶詰などで交代で食事を取り、病院の廊下で眠った。寒さはそれほど厳しくなく、テントに宿泊する救護班よりましといえた。震度5強の余震もあり、免震構造の病院は地震の揺れがその構造のため長く続いた。

打ち合わせなどで30～40代の新潟支部の人が積極的にアドバイスしていて、地震に対する経験の差を感じたし、石巻のスタッフが泣き言ひとつ言わず仕事をこなしていた。2人とも被災して家を流され「救護所が家」と出ずっぱり。気が張っていたためかそれほど疲れも感じず、もっと現地にいたい、残る人に悪い、と後ろ髪を惹かれる思いで帰りのバスに乗ったが、本部で1泊して帰熊したときには、心の中でほっとするものがあった。